滝廉太郎物語

わが愛の譜（うた）

新潮文庫

日本音楽著作権協会
(出)　許諾番号　第9307204-301号

わが愛(あい)

—滝 廉太郎物語—

新潮文庫　こ-23-1

平成五年七月二十五日　発行

著者　郷(ごう)原(はら)宏(ひろし)

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六-五一一一
編集部(〇三)三二六六-五四四〇
振替　東京四-八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Hiroshi Gôhara 1993　Printed in Japan

ISBN4-10-136211-4 C0173

[illegible]文庫

わが愛の譜（うた）

—滝 廉太郎物語—

郷原 宏 著

新潮社版

目次

第一章　むかしの光……七
第二章　蟬時雨……二五
第三章　花の宴……四一
第四章　春の海……五九
第五章　夏草……七五
第六章　蛍雪……九五
第七章　青雲……一一三
第八章　花と月……一三三
第九章　飛翔……一五七
第十章　病雁……一七七
幸福な悲劇――あとがきに代えて……二〇五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わが愛の譜（うた）

——滝 廉太郎物語

第一章　むかしの光

土井晩翠が初めて滝廉太郎の故郷、大分県竹田市を訪れたのは、南太平洋で日米両艦隊が激突した昭和十七年（一九四二）秋のことである。十月二十三日、廉太郎と所縁の深い岡城址で没後四十周年の慰霊祭が営まれることになり、その来賓として招かれたのである。

仙台ではすでに秋が深まり、氷雨が舗道の落葉を濡らしていたが、ここにはまだ夏の名残があった。重く枝を垂れた木々が南国の日を照り返している。旅の途中で車窓から見てきた東京や大阪は戦勝気分に沸き立っていたが、その喧騒もここまでは届かない。

岡城址へ続く坂道を歩いていると、肌が少し汗ばんできた。稲葉川を渡ってきた風が頬に快い。晩翠は着ていたオーバーを脱いで左腕に抱えた。右手には象牙の握りのついたステッキをついている。

「先生、お持ちしましょうか」

昨日から案内役をつとめている佐々木善一が、背中から声をかけた。佐々木は仙台の第二

高等学校時代の教え子で、東京高等師範学校を出たあと、二年ほど前から地元の大分師範の教壇に立っている。この男がいなければ、自分はおそらくここへ来ることはなかっただろう。

「いや、結構だ。わたしを年寄り扱いせんでくれ」

「はい。しかし、先生はもう――」

「うん、七十の坂を二つ超えた。人生は短く芸術は長しというが、人生も決して短くはない」

「すると、滝さんに会われてから――」

「ちょうど四十年になる。きみが生まれる前の話だよ」

それは生涯でたった一度の出会いだった。明治三十五年（一九〇二）八月二十五日夜、ロンドンはテームズ川のチルベリー・ドックに接岸した若狭丸の船上で、晩翠は「荒城の月」の作曲家に会ったのである。そのときどんな話をしたか、今ではもう思い出せない。ただ、月の美しい夜だったこと、廉太郎がその月のように繊細な美青年だったことだけは、今でもはっきりと憶えている。

その前年の六月、晩翠は就任して間もない二高教授の職を辞し、自費で欧州遊学の旅に出た。当時の土井家は仙台市内に十数軒の家作があり、近郊に広大な小作地を所有していた。また、朝鮮には千三百町歩の山林があり、そこで産する木炭の量は原州で一、二位を争うと

いわれた。

そういうわけで、遊学資金に事欠くようなことはなかったし、このまま田舎教師として一生を終わりたくないという焦りもあった。何よりも英文学を通じて知った欧州の文明と文化を自分の眼で直接に確かめてみたいという思いが強かった。そこで、二年前に芳賀矢一博士の媒酌で結婚した妻の八枝を仙台の家に残して、一人で欧州航路の船に乗った。ちなみに、結婚当時、八枝は東京音楽学校本科に在学中だったから、滝廉太郎の一年後輩ということになる。

約一年かかって英仏独伊を巡歴したあと、再びロンドンに戻ってホメーロスに関する文献集めに精を出していると、在英日本大使館から連絡が入った。昨年秋からドイツに留学していた滝廉太郎が病いを得て帰国することになり、八月二十五日にテームズ埠頭に接岸する若狭丸に乗っているというのである。

晩翠と廉太郎は、二年前に文部省が公募した中学唱歌「荒城の月」の作詞・作曲家として、今や日本中に知られたコンビだったが、これまで直接に顔を合わせたことはなかった。廉太郎の胸の病気はかなり重いらしいという話だから、この機会を逃せば、もう二度と会えなくなるかもしれない。

晩翠は、ロンドンへ来てから親しく付き合うようになった姉崎嘲風とともに、取るものも取りあえずチルベリー・ドックへ駆けつけた。嘲風こと姉崎正治は、東京大学哲学科在学中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に高山樗牛らと『帝国文学』を創刊した浪漫派の文芸評論家で、宗教学を修めるために二年ほど前からロンドンに留学していた。晩翠は仙台二高で同窓だった樗牛に誘われてこの雑誌に加わり、第二号から戸川秋骨らとともに編集委員をつとめた。晩翠という号はそのときにつけたもので、宋代の詩人范質の詩篇「遅々澗畔松　鬱々含晩翠」から採った。

船室で二人を迎えた廉太郎は、顔色こそ悪いものの、思ったより元気そうだった。晩翠が名乗りながら手を差し出すと、その手を両手で握りしめた。

「ああ、晩翠先生。いつかお目にかかりたいと思っていました。こんなところでお会いするなんて、不思議なご縁ですね。わざわざお越しいただいて、ありがとうございました」

「いやあ、まったく。ロンドンでお会いするとは夢にも思いませんでした。わたしのへたな詩にすばらしい曲をいただいて、こちらこそお礼を申し上げたい。滝さんも思ったより元気そうで安心しました」

それから三人は甲板へ出て、涼しい川風に吹かれながら小一時間ほど歓談した。川面に映った月が波に砕けて、ひっくり返した宝石箱のようにきらめいていた。チルベリー・ドックは市内から三十マイルほど離れているうえに、あたりには倉庫が建ち並んでいるので、街の灯もここまでは届かない。そのために月光の明るさが、いっそう強調される。

晩翠は、「荒城の月」のモチーフが、学生時代に訪れたことのある会津若松の鶴ヶ城と白虎隊の悲劇にあったことを話した。そして、そこにはもちろん、自分が育った仙台の青葉城

のイメージも投影されている。

「ドイツでもイギリスでも、古い城をたくさん見てきましたが、石で造られているせいか、どうも風情というものがない。そこへいくと、日本の城は優美で、月と花がよく似合うように思います。城にまつわる悲劇のイメージが月や花に近いためでしょうか」

廉太郎は、初めて「荒城の月」の詩を読んだとき、少年時代を過ごした竹田の岡城址を想い浮かべたと語った。そこではよく尺八の練習をしたし、夏休みには試胆会も開かれた。岡城址は自分の音楽の原点だといっても過言ではない。

「〝千代の松が枝わけいでし、むかしの光いまいづこ〟というところはもちろん、一木一草、風のそよぎに至るまで、あの詩のイメージにそっくりなんです。だから、詩を読んでいるうちに、どんどん曲想が湧いてきて、五線譜に書き写すのがもどかしいほどでした。あの曲ができたのは、すべて晩翠先生のおかげです」

感情が高ぶったせいか、それとも真夏にしては冷たい夜風のせいか、廉太郎は急に咳こみ始めた。体をくの字にして手すりにもたれ、ズボンのポケットから白いハンカチを取り出して口にあてた。咳はなかなか収まらなかった。

嘲風は、日頃の多弁にも似合わず、この日はもっぱら聞き役に回っていたが、咳こむ廉太郎の背中を軽く叩きながら言った。

「滝くん、きみは日本の音楽界の輝ける期待の星なんだ。病気なんかに負けてもらっては困

る。気を強く持って、どんどんいい曲を作ってくれたまえ」
「はい。ありがとうございます」
「おい、晩翠。今度は『テームズの月』という詩を書けよ。それに滝くんがドイツ仕込みの曲をつけて、世界的に売り出そうじゃないか」
「ああ、そいつはいいな。滝さん、早く病気を治してください。また日本でお会いする日を楽しみにしています」
「先生もどうかお元気で。『テームズの月』はぜひ実現させましょう」
晩翠と廉太郎は、最後にまた固い握手を交わした。廉太郎の丸い眼鏡の奥の眼が心なしか潤んでいるように見えた。晩翠の胸にも熱いものが込み上げた。このとき晩翠は三十一歳、廉太郎は二十三歳だった。
廉太郎に別れを告げて若狭丸のタラップを降りながら、嘲風が晩翠の耳にささやいた。
「気の毒だが、あれはもうだめだな。背中に死神が取り憑いているのが見えた。美神もときには酷いことをなさる」
若き心霊学者のこの予言には、妙に説得力があった。晩翠も薄々それを感じていた。そして、この予言は、それから十か月後に的中した。『テームズの月』は、ついに実現しなかったのである。

晩翠は岡城の本丸跡に立っていた。眼下には稲葉川と白滝川の清流が、なだらかな丘陵の裾を洗うように流れている。南には阿蘇山と祖母の連山が、北には九重の山々がつらなって、小さな盆地を抱いている。樹齢八百年をへた老松は遠く源平時代からの栄枯盛衰の歴史を伝え、崩れかかった城壁は厚い蔦蔓に覆われ、擦り減った石段は緑色に苔むしている。そして、平地は一面の薄の原だ。城のたたずまいは、やや小ぶりな点を除けば、これまでに見てきた青葉城や鶴ヶ城と変わらないが、日差しが強い分だけ陰影がはっきりしている。

「なるほど、これがきみの荒城ですか」

晩翠は、そこに廉太郎がいるかのように、空に向かって語りかけた。

「はっ、何でしょうか」

背後に立っていた佐々木が聞きとがめて、声をかけた。

「うん、実にいい眺めだと言ったんだ」

「そうでしょう。自分はこの景色が忘れられなくて、地元で奉職することにしたんです。滝さんも最後は大分に戻って満足されたんじゃないでしょうか」

それは違う。まだ若かった滝くんは、やり残した仕事に憾みを呑んで死んだはずだ。それにひきかえ、このわたしは、もう何もすることがないのに、おめおめと生き永らえている。

晩翠は、口元まで出かかった言葉を飲み込んで、佐々木を振り返った。

「さて、ぼつぼつ式が始まる時間だ。みなさんをお待たせしては悪い」

岡城址の二の丸跡、八百年の樹齢を誇る老松の根方に「荒城の月」の詩碑が建っている。没後三十周年の記念事業として昭和九年（一九三四）に建てられたもので、碑面には晩翠の筆跡がそのまま刻まれている。

慰霊祭は、その詩碑の前で行なわれた。地元の市長、県会議員、商工会の代表などが次々に立って挨拶をした。しかし、その九州訛りの強い挨拶は、午後になって風が出てきたせいもあって、晩翠にはほとんど聞き取れなかった。

滝廉太郎は、ここではすでに神様だった。誰もが、自分はいかに神様の近くにいたか、神の御業にどのように手を貸したかという話をした。そして、神の事業を紹介する際には、必ず晩翠の名を引き合いに出した。

「もし、ここにお見えの土井晩翠先生なかりせば、滝先生の事業もまた成らなかったのであります」

なるほど、もし自分がいなければ、名曲「荒城の月」は生まれなかったかもしれない。詩が先にあって、曲は後から作られたからだ。だが、それはお互いさまで、もし滝廉太郎がいなければ、自分の詩が人々に愛誦されることはなかった。その意味で、作詞者と作曲家は運動会の二人三脚のようなものだと言っていいが、その相手がとっくにゴールインしてしまった今も、自分は一人で人生の長いトラックを走りつづけている。神様相手じゃ走りにくいよ。

滝くん、どうして勝手に先にいってしまったんだ。長いだけで内容のない挨拶を聞き流しながら、晩翠は内なる廉太郎に語りかけていた。

「わが帝国陸海軍がガダルカナル島に進撃を開始したこの時期に、滝先生の慰霊祭が挙行されるということは、まさに国家的な慶事であります」

場違いな胴間声に壇上を見上げると、満艦飾のように勲章を飾り立てた軍服姿の男が、音楽とは縁のない熱弁をふるっていた。それを聞いて、晩翠は、日本は今、米英を相手に戦争をしているのだということを思い出した。

男は何を思ったか、いきなり「星落秋風五丈原」の一節を朗唱し始めた。おそらく晩翠が来ると聞いて、学があるところを見せるために大急ぎで暗記したのだろう。ときどきつっかえると、左手に隠し持った紙片に眼をやって、再び蛮声を張り上げた。そして、各連の最後の「丞相病あつかりき」のところでは、思い入れたっぷりに眼をつむって見せた。

「何度読んでも、これは実にいい詩であります。晩翠先生のような立派な詩人がおられるかぎり、日本は戦争に負けるはずがない。自分はそう信じて疑わない者であります」

晩翠は軍人が嫌いだった。特に自分の詩を軍歌のように高唱したりする軍人が嫌いだった。嫌悪を通り越して、憎悪していたといってもいい。

明治三十二年（一八九九）、二十七歳のときに第一詩集『天地有情』を刊行して以来、晩翠といえば東洋国士風の愛国詩人、晩翠詩といえば漢詩調の悲壮美に満ちた男性的雄渾の調

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com